

学習基盤を育てる



Point 1 学習準備 ～学習に向かう姿勢をつくる～

特別支援教育の視点から

学習を気持ちよく始めるためには、最低限必要な学習用具がそろっていることが大切です。あるはずの物が無いという状況に緊張が高まり、学習以外のことでエネルギーを使ってしまう子どもがいます。そのようなとき、担任が学習用具を用意しておき、貸し出すことが有効な場合もあります。発達の段階に合わせて、用具の管理を子ども自身ができるよう指導する必要があります。また、学習用具は一律ではなく、「柔らかい鉛筆や、弾力のある下敷きを使う」など、子どもの実態に合う物を使わせる工夫をしましょう。

●必要な学習用具をそろえる●

学年が上がってくると、必要な物も増えてきます。絵や一覧表などを用いて必要な物を自分で準備できるよう指導したり、記名を徹底させたりします。低学年の頃から、置き場所を指定するなど、管理方法について指導することや、机の中を整理・整頓できるよう習慣付けていくことも大切です。



算数の準備物の掲示例

●筆箱の中をそろえる●

毎日必要な筆箱。授業に集中させる観点からもできるだけシンプルな物を持たせたいものです。

小学校では、自分で管理しやすいように、できれば箱形で鉛筆が固定できて中身が一目で分かる物が望ましいです。例えば、入門期には「鉛筆5本・赤鉛筆1本・消しゴム1個・定規1本」のように物と数を具体的に示して指導します。その際、筆箱など、できるだけ6年間使うように指導すると、物を大切にすることが育ちます。



入門期の筆箱例

Point 2 聞く・話す活動 ～学び合う学習集団をつくる～

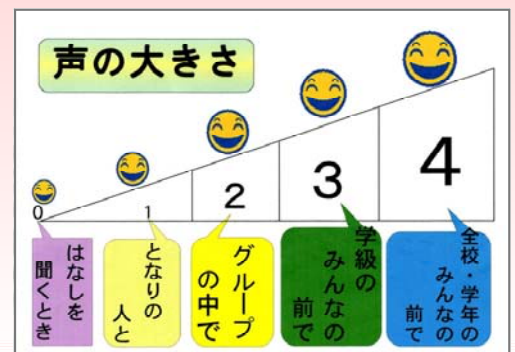
特別支援教育の視点から

聞く、話すという活動が大切にされる授業は、学習効果が期待できます。しかし、子どもたちの中には、「発言の順番を待てない」、「話を最後まで聞くことができない」、「どの声に集中してよいのか分からない」など、聞くことが苦手な子ども、また、自分の考えなどをうまく話せない子どもがいます。聞く、話すことについてルールをつくり、学級のみんなが守れるよう、練習を積み上げることが大切です。学び合う授業を成立させるために、新学期の早い時期に徹底させたいものです。また、教員は、お手本となる話し方や聞き方を心掛けることが大切です。

●よい話し手● →聞き手にとって聞きやすい話し方

発表するときは、指名されてから発言するというルールを身に付けさせます。

場に応じた声の大きさや言葉遣いを意識させることや、文末まできちんと話す指導は、言葉を選んだり、相手に伝わる話し方を工夫したりすることにつながります。



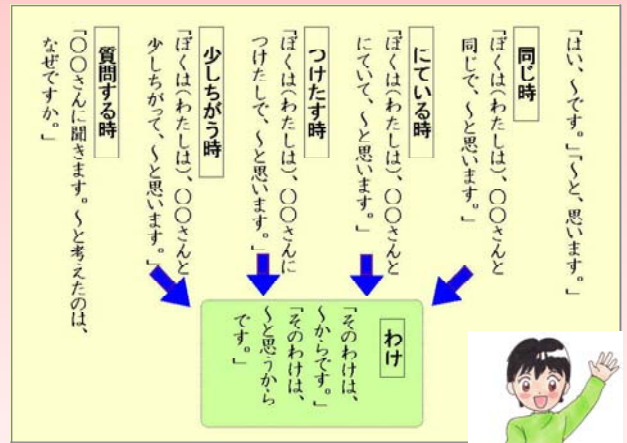
●よい聞き手●→話し手が気持ちよく話せる聞き方

話し手を見ることはもちろん、しっかり聞いていることを相手に伝わるようにすることが大切です。うなずいたり、相づちを打ったりしながら聞くことも効果的です。相手の言いたいことを最後まで聞くことができる学習集団が育つと、話し手は安心して話すことができます。

●学び合う意識●

自信のない意見でもみんなが受け止めてくれるという安心感は、学び合う学習集団には欠かせません。相手が伝えようとする内容を汲み取り、自分の考えを積み重ねていくことができると、学び合いは活性化します。このことは、お互いを大切にしようとする日ごろの学級経営との関連性が大きいと言えます。

「話型を活用すること」を指導すると、話しやすくなるだけでなく、自分の考えと比べながら聞く力や、自分の立場を明確にして話す力などが高まります。子どもの実態や発達段階、教科の特性を踏まえた指導が重要です。



話型の例



Point 3 家庭学習 ~学びを確かなものにする~

特別支援教育の視点から

すべての子どもが家庭学習に取り組むことができ、主体的に学習に臨む習慣を身に付けるためには、「各自が今持っている力でやりきれない内容であること」や、「子どもなりに、取り組むことに意義が感じられる評価があること」などが大切です。

発達の段階に応じて、「こつこつと粘り強く取り組む力」、「計画的に取り組む力」、「自己評価ができる力」を付けるなど、学校全体で共通理解を図って取り組むことが大切です。

●宿題●

授業の内容を振り返ったり、授業で学んだことの定着を図ったりすることができる適切な課題を設定することが重要です。その際、個に応じて、難易度や分量が調整できる課題や調べ学習など、単元や発達の段階に応じて学習への興味や関心を広げることができる課題も設定したいものです。

また、「テレビを消す」、「姿勢に気を付ける」、「字は丁寧に書く」など、家庭学習に臨む約束を保護者と連携して、意識付けることもよい習慣化に役立ちます。

●自主学習●

小学校高学年や中学校では、「自分のために、自分にとって必要な学習をする」ことが大切になってきます。しかし、何をどう学習するかという計画や見通しの段階でつまずく子どもが多いのが現状です。

そこで、授業での振り返りを生かして、「苦手なところを復習すること」や「さらに学びたいことを調べること」など、自主学習へとつなげる言葉かけや例示が必要になります。

また、継続して取り組ませ、学習する習慣を身に付けさせるためには、例えば、学習記録表の取組も効果的です。

他の子どもががんばる様子(学習時間、ノートなど)に触れる機会を設ける。

中学生の学習記録表の例

自分の努力の足跡(ノートの冊数、累積学習時間)から満足感が得られるようにする。

学習効果を高め、意欲をかき立てるため、折に触れ教員がアドバイスする。

自分の学習の様子を見つめる欄を設ける。